

第31回平和祈念コンサート 講演会

【石塚太郎氏】 皆さん、こんばんは。

今、御紹介にあずかりました、石塚太郎と申します。

今日は、戦争体験の話をさせていただきますので、よろしくお願ひします。

私は、昭和9年（1934年）8月4日に生まれました。

たまたま、今日は8月4日で、私の89歳の誕生日です。

それで、昭和16年4月に四谷の小学校1年に入学した。

そうしたら、その年の12月8日に戦争が始まった。

昭和18年、小学校3年になったときに、戦争も激しくなつて、東京にいたのは危ないというので、疎開することになった。

疎開というのは、東京にいと危ないから、地方へ避難するという、そういう意味だけれども、疎開の方法が二つあつて、一つは縁故疎開。それから、もう一つは集団疎開という。

縁故疎開というのは、親戚だとか、それから知人のところへ引越すことです。それで、集団疎開というのは、学校単位で、親と子供が別々に別れてしまう。子供だけの集団で、地方の旅館とかお寺、そこへ避難したわけです。

親と別れてから、ずいぶん悲しい思いをしたという話を聞いています。

私の方は縁故疎開で、父の実家。埼玉県の幸手というところがあるのだけれども、その幸手の先に、権現堂川村大字上吉羽という桜の名所がある。今でもテレビにときどき出る。そこの土手の下に実家があつて、そこへ疎開することに。

それで、父の実家で、自転車とリヤカーを借りて、家財道具を四谷から実家まで運んだ。

片道40キロあって、それで、道路が今みたいに舗装していない。それで荷物を運んだわけです。当時は、車のガソリンは戦時物資だから、なくて、車なんか頼めなかったから、自分で運んだ。

それで、半年運んだらリヤカーのタイヤが壊れた。タイヤは売っていないから、それで荷物を運ぶのをやめた。

それで、我々、子供が5人と両親で7人家族が父の実家へお世話になることになった。

最初は食事を一緒にしていたのだけれども、そのうち別になって、闇米を買ったり、それから、母親がリヤカーを引いて隣村に行って、東京から持っていった着物を米と交換する、物々交換。そういうことをして、それから、裏の土手を耕して、野菜を作ったりした。それで、梅干しと味噌、これは実家で作ってくれた。そういうものを食べた。

それで、学校は、実家から20分ぐらい行ったところに村の小学校があって、そこへ毎朝、上級生がみんなを連れて、歩いて通うわけです。その頃は裸足で砂利道を歩く。初めは足の裏が痛くて歩けなかったけど、すぐに慣れた。

それで、学校に行く途中で、空襲警報の前に警戒警報というサイレンが鳴る。そうすると、学校には行かないで途中でうちに帰る。解除になると、また学校に行くわけです。

それで、無事に学校へ着くと、午前中は勉強する。それで、お昼は母親が作った弁当を、日の丸弁当という。日の丸弁当は、弁当箱の真ん中に梅干しが入っている。そうすると日の丸の旗に似ているでしょう。それで日の丸弁当と言った。それを食べるわけ。

食べたけれども、半分食べて、あとは、うちに持って行って、うちで、またよく味わって食べた。1回で食べるのもったいない。だから、2回に分けて食べた。

それで、学校は、午後は軍事訓練といって、兵隊論法みたいなのをやる。

それで、その後に、わらで縄をなう。校庭にゴザを敷いて、そこで縄をなった。何で縄をなるのかわけが分からないのだけれども、縄をなった。

終わると、学校からうち帰るわけです。そうすると、ヒューン、ドドドドドーっと飛行機が急降下している音と、機関銃で撃たれる音がする。音はするけれども、飛行機は見えない。

そうすると、急いで桑畑に隠れるわけです。それで、静かになった頃に出てきて帰るのだけれども、今度は、空高くB29というアメリカの爆撃機が編隊を組んで飛んでいるのです。

それで、前はB17というのが来たのだけれども、B29というのに変わって、それは飛行機がでっかい。大きい。それが、編隊を組んで悠々と高い空を飛んでいるわけです。それで、太陽の光に照らされて銀色に光って、ああいう光景が、ずいぶんあった。

それで、秋になると、学校の帰りに、道路に柿の実が落ちていて、それを拾って食べた。風が吹くとうんと落ちる。そうすると嬉しかった。

それで、ある晩、南の空が真っ赤になった。それで、あくる日、天気がいいのに空が真っ白。それで、太陽が丸い輪になって見た。それで、白い粉が、灰が飛んできて、それは、B29が焼夷弾を東京へ落として、東京が一晩で灰になった。

それでね、うちの父の兄さんというのが、まだ四谷で頑張っていた。

それで、心配して、父が電車を乗り継いで四谷まで行った。そうしたら防空壕から顔を真っ黒にして兄さんが出てきて、生きて会えた。

それで、夕方に帰ってきて、生きて会えたよ、これは奇跡だと、そう言っていた。

その話というのは、B29が東京に焼夷弾をいっぱい落として、一晩で灰にな

ったと、前に言ったように、その話だけれども、昭和20年の3月10日の東京大空襲という話です。

それで、8月6日、これは広島が、それから8月9日は長崎。特殊爆弾という爆弾が落ちた。当時は原子爆弾なんて分からない。後になって、それが原子爆弾だと。

それで、20年8月15日の朝、ラジオで、今日のお昼に重大放送があると、そういう放送が流れた。

それで、お昼になってラジオの周りにみんながたかって待っていた。

そうしたら、今日は、戦争に負けて、戦争がもう今日で終わったと。終戦の放送だった。1945年（昭和20年）8月15日、これで終戦になった。

それで本当にほっとした。というのは、毎日、夜になると飛行機が爆音で飛んでくる。いつ爆弾が落ちるかと思って、冷や冷やして寝られなかった。

それから、夏になると布団の中にノミがいて、そのノミに食われて痒くて寝られない。

それで、今日から爆音だけ聞こえないなと思って、それで、ほっとした。

それで、戦争が終わったわけです。そうしたら、今度は疎開しているところから東京へ戻らなきゃならない。ところが戻るところがない。

だから、おじいさんが、120坪の土地に24坪の木造の平屋建てが建っている現在の場所を、当時のお金で、4万円。苦勞して買ってくれた。そこへ帰れるようになったわけです。

それで21年の春、土手の畑にサツマイモの苗をみんなで植えて、そのサツマイモが秋になって実るのを待って。それで東京へ帰ることにした。

そうしたら、たまたま車が、木炭車という車があって、それが頼めた。木炭車というのは、ガソリンで走るのではなくて、木を細かく切って、それを燻す。そ

うするとガスが発生して、そのガスの力でエンジンが回る。

当時、そういうのができた。木炭車。それを頼んで、一家7人と、それから家財道具と、それから、薪。それから、お芋が2俵できて、それを積んで東京に帰った。

そうしたら、東京に帰ったら大変でした。食べ物がなくて。

それで、缶詰とサツマイモ、それからトウモロコシの粉。あれは家畜の餌です。そういうのが配給になった。

それで、水は井戸。それから、ガスはまだ引いていないから、薪。それから、電気は夕方になると2時間ぐらい電気がつく。それで、あとは真っ暗になってしまふ。

そういうところで、缶詰を開けると、中に何が入っているのか缶詰に書いていない。開けるとジャガイモ、それから豆、それからソーセージの水煮。味がついていない水煮。そういうのが出てくる。

それで、トウモロコシの粉は、当時、サッカリン、ズルチンは知っているでしょう。そういうのが売っていた。

それを、粉の中に入れて、お湯で練って、それを焼いて食べる。

それから、お芋は、栄町にパン屋があって、そのパン屋が、電気が来ているときだけ持って行って、お芋を焼いてもらった。パン屋は粉がなくてパンが焼けない。それで、お芋を焼いてくれた。

そういうものを食べて、家族7人が何とか暮らせるめどが立ちつつあった。

それから、続いて、今度は焼夷弾の話をする。

焼夷弾というのは、俺は実物を見た。長さが80センチぐらい。径が10センチぐらいの、鉄の筒。それで外側にピンクとブルーの塗装がしてある。だから、2種類あった。

中に乳白色のドロドロの液が詰まっている。それで、それがすごいガソリン臭い。そういうのを、B29が空から束にして落とした。

そうすると、束が途中でバラバラになって下に落ちる。そうすると、その中の液体に火がついて、その液体が飛び散る。それで、日本の市街地は、みんな火事になって焼かれた。それが焼夷弾の話。

話すところはまだいろいろとあるのだけれども、この辺で戦争体験の話は止めさせていただきます。

長いこと御清聴ありがとうございました。終わります。